

# 宗教倫理学会設立の意義

瓜生津 隆真

(宗教倫理学会会長・京都女子大学名誉教授)

宗教倫理学会は、宗教の視点から現代の倫理的課題を幅広く考察し、その成果、とくに 21 世紀における宗教のあり方や可能性を世界に向けて発信し、社会的にそれを共有することを目的として、設立された。宗教や宗派の枠を超えて、すなわち宗教的立場の違いを超えて互いに宗教の社会に果たすべき使命や役割を語り合っていこうとするのである。また宗教と科学の間における対話も進めていこうとしている。

ところで、近代以降の人間社会を見ると、実にさまざまな人間の諸問題が指摘できる。とくに 21 世紀を目前にして、20 世紀の百年をかえりみると、急激な科学技術の進展は、人間生活に大きな変化をもたらし、それは意識の面にまで及んでいる。そのことは好むと好まざるとにかかわらず、宗教にも大きな影響を及ぼしている。宗教的な視点からは、近代化とは「世俗化」の過程であるということは誰もが認めるところであるが、世俗化とは社会のなかで聖なる領域、あるいは宗教が形成する部分がスリム化していくことを意味するのである。しかし宗教は本来人間の生き方と深く関わっているし、そのことはこれからも変わることはないと思われるから、人間社会の未来を考えるときには、当然のことながら、宗教の未来を考えねばならないのである。そうしてそこに、社会が持っている価値規範と宗教の超俗的、超越的な 往々にして現実否定的に向かうが 価値観との間に根本的に問い直さねばならない緊張が生まれるのである。

しかしながら、宗教と倫理との関わりは、かつて考えられていたほどにその検討は容易ではない。なぜなら、たとえば生命倫理一つとってみても、その考察には、死生観をはじめあらゆる文化の諸領域にわたる検討が求められるからである。宗教と科学との関わりについても、いまや人間の生命そのものの見方に深くつながっていて、さらに生き方の本質的追求と無関係には考えられないのである。いまから 8 年前になるが、岩波講座『宗教と科学』全 10 巻のシリーズが刊行された。その第一巻のはじめに、21 世紀をより良く生きるために科学と対話のできる真の宗教を求めることの大切さを訴え、このように述べている。

「科学・技術が飛躍的に進み経済大国化した今日の日本では、人々は一見平和で満ち足

りた生活を送っているように見える。しかし一方には多くの新新宗教の驚くべき隆盛があり、他方ではさまざまなかたちをとった修業や神秘主義への憧れが人々の間に広がっている。それから見て、私たち日本人はテクノロジーや経済の豊かさでは満足することのできないさまざまな心の飢えを抱いていると思われる。宗教はいったいどんな役割をはたしているのだろうか。さらに日本人にとって宗教とはいかなるものなのか。…」

このように宗教と科学について、さらに宗教そのものについて深く考えていくことを呼びかけているのである。二十年余り前になるが、現代日本における宗教をテーマにした『宗教を現代に問う』という5冊のシリーズが毎日新聞社から刊行された。その中に分子生物学の渡辺教授の発言がのっている。遺伝子操作による人為的社会の可能性にふれて、未来の人類社会をどう造っていくか、それは人間の価値観によって決まるが、そのことは科学の問題ではなく、宗教が引き受けなくてはならない問題である、と指摘している。いまや科学技術はさらに進み、環境破壊が地球的規模で問題となり、深刻化している。そのことを思うと、人間自身を深く掘り下げ、欲望の恐ろしさを知って、他と共存することのできる道を提示する真の教えに謙虚に耳を傾けなくてはならないであろう。

科学と宗教の間における対話のほか、現代の人間社会には実にさまざまな容易に解決のできない問題が生じてきている。宗教者もまたそれらと無関係にあることはできないのであって、いま宗教者に求められているのは、たとえば福祉について、教育について、あるいはカルト宗教について、どのように考えているか、それら問題の本質と問題解決の方法についての具体的な発言である。

かつて「宗教は現代不在であり、現代は宗教不在である」(西谷啓治)といわれた。このことは現代のいまもそのまま通用する。「宗教は現代不在」とは、正しく上記のような現代社会の諸課題にたいしての宗教者の取り組みが欠如していることであり、したがって宗教が現代社会の苦悩になんら応えていない現状をきびしく批判しているのである。ダニエル・ベルの言葉を借りると、現実の宗教が破産している、ということにほかならない。ちなみに彼は、宗教が破産したところでは、つねに擬似宗教が台頭する、と述べている。カルトなどの日常生活から逸脱する宗教運動が活発化することをさしているのである。「現代が宗教不在」とは、世俗化が進み、もはや現実に宗教に何も期待せず、また無関心になっていることであり、広く宗教が社会から退化していくことである。とくに既成教団に対してその傾向が著しいことをさしているのであって、現代社会の不安と昏迷の原因がそこにあることを鋭く衝いているのである。

宗教と倫理との関係とは、現実の人間生活において宗教がいかに機能しているか、また宗教的な価値観が人間の行動規範に対していかに問いを投げかけることができるか、さらにそこに課題を見出し、問題解決への道を提示できるか、ということを中心とするもので、そこに焦点があると思われる。要するにいまわれわれ宗教者が、自ら主体的に宗教者としての自覚を新たにし、社会の苦悩を取り除くために、なすべきことを具体的に実践していくことが何よりも大切な課題となっているのである。

釈迦牟尼のエピソードの一つは、一人淋しく病いの床によこたわる弟子を手厚く看病されたことを伝えている。胃腸を病んだ修行僧は仲間から見捨てられて不浄物のなかに埋もれていた。釈迦牟尼は汚れた身体をきれいに水で洗い、体をさするなど看病をし、「修行僧たちよ、われに仕えようと思うものは、病者を看護せよ」と諭したという。ちなみにこのことは玄奘のインド旅行記『大唐西域記』にも紹介されている。この釈迦牟尼の精神は以後も引き継がれ、前三世紀にでたアショーカ王は施薬、療病、悲田などの施設をつくり、その伝統は日本にも受け継がれたことはよく知られている。その精神とは何かというと、すべての人に対する平等の慈悲であることはいうまでもない。

かつて信仰誌『自照』が刊行されていたが、その創刊号の巻頭言に足利瑞義師はこのように述べている。「釈迦はこの地上において全人類は如何に完成せられるべきかといふ問題を身を以て解いて、全人類の目的方向は斯くの如くあるべしといふことを示された。釈迦は能仁、牟尼は寂黙で、能仁寂黙は智慧と慈悲の意である。全人類はこの完成に向って不識のうちに生活しているのである。本誌の使命は全人完成の意味を明瞭にし、以て全人に除苦悩の道がすでに用意せられてあることを説くものでありたい。」これは昭和17年の発言であるが、宗教の目的を明確に示したものとしていまなおその意義を少しも失っていない。

先述のように、近代以降世俗化の波がひたひたと押し寄せ、宗教集団が主となって行ってきた教育事業、福祉事業、医療事業などが世俗業務として国や地方自治体に移行していく。宗教集団はそのため純粋な宗教機能にその活動が特化し、社会における教団の教勢が制限され削ぎ落とされていく。しかし宗教が社会とともにあるかぎり、教育や福祉から宗教が全くなくなるのではない。むしろ教育や福祉の原点を深く追求していく時、宗教的な立場からの検討は不可欠であるといえよう。

社会が近代化するにつれ、宗教は社会の中心から辺境へ追いやられ、個人や社会に対する影響力が弱まっていくことになる。現に教会や寺院に足を運ぶ人が日とともに減少して

きているのであって、既成教団が衰退しつつあることは明らかであり、その傾向はますます加速していると思われる。だれもそれを否定できないであろう。また宗教は世俗化しあるいは個人化していくと、道徳や倫理と近いものになっていく。さらに価値観の多様化は宗教にも影響し、宗教的多元主義の傾向もでてくる。もはや宗教は社会的・政治的に重要な問題ではなくなる。近年に到るまで、そのように予測されていたのである。

ところがこの予想に反して、1970年代から宗教的な様相が変わってきたのである。世界の各地で多種多様な宗教回帰現象が出てきた。聖典の権威を信じて文字通りに受容し、社会全体を宗教的倫理で律しようとする「原理主義」がその一つの現れである。また社会全般の近代化により個人化の方向をたどると思われていた宗教が、民族集団の共同体意識としての傾向を強めてきたのもその現れの一つといえる。合理性を重んじた安定した社会構造が崩壊し、人間のアイデンティティが喪失して、新たなる自己像とコミュニティを求めようになったのである。合理主義への不信は、その対極にある神秘主義への憧れを生み出していく。このような宗教のリヴァイヴアル現象は、現代の社会に新たな問題を提起することになった。たとえば宗教間の対話ということも、宗教的対立があるところでは容易ではない状況が出てきたのである。

21世紀の社会を見据えて宗教の役割を考え、宗教者として何をなすべきかを実践的に明らかにしていくことがいま強く宗教に求められている。宗教の多元化、民族問題における宗教的対立、カルト宗教の流行など、宗教に関わる問題はますます複雑化し、深刻となりつつある。このような現代の宗教と社会との間における諸問題に積極的に取り組み、宗教のあるべきすがたを考えていこうというのが、繰り返しになるが、この学会設立の趣旨である。いま取り組まねばならない課題は実に多岐にわたるが、当面本学会が取り組んで行こうとしている課題は、要約すると、およそ次の六項である。

- 1) 広く宗教と関連する倫理的課題を考え、共通理解を深める
- 2) 宗教間の対話を深め、その場を提供していく
- 3) 宗教と科学との対話を進める
- 4) 宗教的価値観の形成における性差を見据え問題を明らかにする
- 5) 社会の宗教的認識に注意を払い、社会との接点を重視する
- 6) 国際社会に情報を発信できるよう必要な措置を講じる

以上をもって私の宗教倫理学会設立の意義についての基調講演に代えることにしたいと思います

う。会員の皆さんがこれらの課題をめぐって、大いに討論し、活発な意見を交わされるよう心から期待する。